

第 38 回土木計画学研究発表会（秋大会）：2008 年 11 月 1 日～3 日（和歌山大学）
セッション討議内容の記録

セッション名：コミュニケーション(2)	
日付：11月 1日（土）曜日、セッション時間：15:00～16:30	
司会者名（所属）：松村暢彦（大阪大学大学院工学研究科）	
討 議 内 容	セッション全体： 専門家は住民や市民の間でコミュニケーションを活発化させるためにどのような役割を果たすことが出来るのか。 ・模型をコミュニケーションの段階に応じて適切に作り分けたり、材質にこだわる。 ・簡易版の教育プログラムを開発し普及させる。 ・四面会議などの手法を適用したり、復興サロンなどを企画する。
	（122）筒井紀行（九州大学大学院） 実験的に模型を使った場合と使わなかった場合の効果の差異を検証できないかとの提案があった。模型の再現性の好ましさについては、コストと情報の質によるが、今回は粘土を使用することによって参加者がその場で土地のイメージを共有することができ、行政職員の専門的知識の獲得にも役に立ったとの指摘があった。
	（123）高橋祐一（群馬大学大学院） 簡略版災害教育手法の開発目的について、限られた時間での効果的な教育だけではなく、詳細な災害教育のきっかけにもなることが期待されている。小学校での防災教育に役に立つのではないかと指摘があった。今回の簡略版の開発は、詳細版の防災教育手法の各プロセスで重要な点を抽出してそれをプログラム化した。
	（124）吉田護（京都大学大学院） 復興まちづくりサロンの位置づけと地域の自立を促すために外部からの専門家支援を話す時期について議論があった。まちづくりにはキーパーソンの役割が大きいが、今回の復興まちづくりのプロセスは、システム化が可能かどうかの議論があった。きたる大規模災害に対応するためには、限られた専門家だけでは対応できず、地域ごとのキーパーソンの養成が急務となっている。